

歯科大学唯一の訪問歯科

新潟病院在宅歯科往診ケアの32年



事の始まりは、ある患者さんの家族の声だった。本学病院に通院していた御主人が、寝たきりになって通えなくなって、困っていると…。ウチの患者さんなら往診してあげたら…と思った。すぐに、病院長に就任したての加藤譲治に相談した。「やりましょう」という、院内の反応が跳ねかえてきた。

ただちに昭和62年（1987）4月、在宅歯科往診ケア委員会が設置された。私は名称にこだわって、あまり使われていなかったCare（介護）に支点をおいた。教授畑 好昭をチーム長として、歯科医師、歯科衛生士、臨床実習生、運転手の4名を構成メンバーとした。患者さんの病状により、口腔外科医や歯科麻酔医が同行する。

対象は、本学病院に通院できなくなった患者さんで、本院から片道1時間以内に居住する方に限った。

事前に家族と十分に面談し、往診時には必ず家族一人が立ち会うこととした。家族から聴取した情報に応じて、各専門科の講師以上の医員が初診に出むく。そこで、患者さんの全身状態を把握し、診療方針と診療計画を立てる。その際、所定の検診表に、患者さんの全身状態、日常生活感作、口腔衛生状態、歯式、義歯の有無、食事状態等を記録する。

初診では応急処置以外は、診察・診査のみで帰院し、患者情報をチームに報告する。多くは重篤な全身疾患や合併症を有しているため、必要に応じてかかりつけ医等に連絡をとる。そのうえで、次回の担当医を決める。往診日は、原則として週2日の午後とした。

訪問診療のノウハウを整えて、半年後の9月、在宅歯科往診ケアチームはスタートした。初めての患者さんは、本院から5分に住む65歳の男性で、脳血管障害で半身不随だった。噛み合わない義歯を調整した。次に、中枢神経障害の患者さんを不定期に5回往診して、短期間で抜歯から義歯装着まで済ませた。

1ヵ月ほどたって、私はチームに同行した。往診には公用車を使用したがるが、プレジデントは目立つように駐車場に難儀する。

みなで診療機器一式をかかえて、玄関から患者さんの部屋に入ると、まずコンソートの位置を確認する。そこに診療機器をつなぐと、配線が蜘蛛の巣を張ったように畳の上を這った。医員たちはそのコードを一々またいで、患者さんのベッドに取りつく。当時の移動用ポータブル診療セットは軽便とはいえ、その取り付けだけで一汗かく。寝たまの患者

さんの背中に枕を押し当て、二人がかりで上半身を起こす。

私は廊下から、彼らの所作を呆然と眺めていた。患者さんの疲労をみつつ、40分ほどの治療・ケアであった。帰り際、「また来ますね」と医員が声がけした。言葉の不自由な患者さんが、寝たまま、胸元に震える両手を合わせて見送った。

当初、本院患者に限ったので、広報もPRもしなかった。患者さんは、3ヵ月で10名足らずだった。この年、65歳以上の寝たきり老人は、新潟県内には9,360名、新潟市内には1,973名もいた。その大半が、歯科口腔疾患を患っているとみてよい。

同年12月下旬に新潟日報紙上に、「歯医者さんが往診する」と報道されたことから、問い合わせや申し込みが急増した。本院患者に限るなどとは言ってもらえない。翌年1月には、診療継続中が5名、往診予定10名、面談中十数名になった。ほとんどが65歳から85歳の脳血管障害で、他に骨折、脳性麻痺等だった。治療は、抜歯、義歯の調整、義歯の作製、口腔ケアとその指導、食餌指導等である。チームのモチベーションは高かったが、患者さんの要望が切実なだけに、医員たちの心労は重かった。

加藤と私は、保険適用もないボランティアなのだからと、新潟県に補助を陳情した。君 健男知事は、新潟歯学部誘致の県側の責任者（当時、副知事）だった。公邸によばれた私たちは、おずおずと趣旨を説明した。それで「いかほどかかるの？」と直に問われて、私は小声で800万円ほどと答えた。構えていた知事は、なあんだ…それっぽっちか、と気抜けしたようだった。その補助金で、病院名をひかえめに掲げた往診用ワゴン車の第一号を購入した。

そのワゴン車に、臨床教育の一環として、登院中の臨床実習生が志望順に同乗した。その最初の学生は、藤井一維（77回卒、現・新潟生命歯学部長）であった。

平成9年（1997）になって、健康保険法が改正され、在宅医療が法的に位置づけられ、それに伴って診療報酬も改定された。

平成16年（2004）10月、中越地震！。チームが中核となって、被災地での応急処置に当たった。震災ののち、避難所や仮設住宅での生活が長引くなか、チームは、本院から連日ワゴン車で被災地を往復し、3ヵ月間、口腔ケアにつとめた。この年の中越

地区の肺炎による死亡率は、震災にもかかわらず例年の半分に減少した。

チーム発足21年後、平成20年（2008）11月、チームの社会福祉活動に対し、「第60回新潟日報文化賞」を受賞した。第二代チーム長の教授江面 晃 が表彰状をうけた。

さらに、平成23年（2011）10月には、保健衛生分野の権威ある「第63回保健文化賞」を受賞した。第三代チーム長の教授黒川裕臣が表彰状をうけた。

平成26年（2014）4月、チームは訪問歯科口腔ケア科として、病院診療科となる。同診療科（白野美和科長）は、専属の歯科医師5名、歯科衛生士4名で構成し、臨床研修医、臨床実習生、新潟短大学生も加わる。ワゴン車3台に分乗して、月曜日から金曜日まで市内を走りまわる。患者さんは、年間約2,000人にのぼった。

私は、平成25年（2013）の某日にワゴン車に同乗した。広い車内には臨床研修医、臨床実習生をふくめて白衣姿の6名がいた。市内北区の特養老人ホーム「愛宕の園」のラウンジには、車椅子に乗った患者さん6名が待っていた。ここには、十数年前から往診している。みな手分けして、手際よく治療とケアに当たる。高齢の要介護者なので、不安をあたえず手早く対処しなければならない。研修医も学生も、訪問歯科の現場にたじろがない一頼もしい限りだ。

次は、中央区の有料老人ホーム「ナーシングホーム文京町」に移動する。ここでもラウンジの患者さんと、車椅子に乗れない個室に出むく。発足当時は個人宅が多かったが、高齢化により今では老健施設が過半を占める。夕方、帰途の車に揺られながら、今更ながら時代の変容を実感した。

平成30年（2018）4月、訪問歯科口腔ケア科のサテライトとして、新潟県央の三条市に「日本歯科大学在宅ケア新潟クリニック」（黒川裕臣院長）を開院した。ユニット・チェアのない訪問歯科専門の歯科診療所である。上越新幹線の燕三条駅から5分の所で、ここから新しい半径16km圏をカバーする。

この新潟クリニックは、歯科大学・歯学部で最初の訪問歯科診療所である。32年間つづく本院の口腔ケア科は、歯科大学・歯学部で唯一の訪問歯科専門チームである。

（写真：個人宅での在宅歯科往診ケア、初期の頃）